

一 次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① シンソウを究明したい。
- ② シンカンセンの乗車券。
- ③ 情報はシユシヤ選択すべきだ。
- ④ ヒンコンに悩む。
- ⑤ 見事なカシヨウカ。
- ⑥ これからの指針を明らかにする。
- ⑦ 綿密な計画。
- ⑧ 肉眼で見える星。
- ⑨ 家路を急ぐ。
- ⑩ 羊を率いる少年。

二 次の問いに答えなさい。

問一 次の①と②の文において、——線部の漢字や言葉の使われ方が正しいものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① ア 新しい仕事を始めたばかりの頃は、五里夢中だった。
- イ 学級会では異口同音にさまざまな意見が出てきた。
- ウ 彼は最も有名な賞をもらい、有頂点である。
- エ 明日こそ、気になっていたことを単刀直入に聞くつもりだ。
- ア ジングルで絶対絶命の危機に追い込まれた。
- イ 人をだましてお金をとるなんて、言語道断だ。
- ウ 春から新しい環境で、心気一転がんばりたい。
- エ 今はまだ正念場だから、ゆっくりしていよう。

問二 次の文の（ ）の言葉を正しい敬語に直し、それぞれ指定字数のひらがなで答えなさい。

- ① このメロンはお客様が（食べる）ものだから、冷やしておきましょう。 五字
- ② 私は明日の展覧会に行つて、先生の作品を（見る）予定です。 六字
- ③ あなたのお母様が（言っ）ていましたよ。 五字

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

《小学校六年生の田川航の拾った子犬は、心ない人の行為で後ろ足首から下がな^い。航は未来への希望をたくして希と名づけていた。希との出会いをきっかけに、犬に関することを夏休みの自由研究のテーマにして、保護者も参観に来る二学期の研究発表の授業に臨んだ。》

「それでは、自由研究発表を行います！ きりーっ！ 礼！ 着席」

日直の声でみんながあいさつすると、ぼくらはすぐに教壇に向かった。

勇輝と唯が、発表内容を書いた模造紙をマグネットで黒板にはる。

その間にぼくは発表内容をまとめたノートを開いて、心の準備をした。

「準備オーケーです」

勇輝のかけ声にぼくはうなずき、大きく深呼吸して顔をあげた。

「えー、ぼくたち三人が共同で行った自由研究の発表を行います。テーマは人のために働く盲導犬の一生についてです」

言いながらぼくは、模造紙にはられた写真を指さして、盲導犬の誕生から順番に説明することにした。

「ぼくらが取材に行った盲導犬訓練センターでは、年間二百頭の子犬を繁殖させています。でも盲導犬になれる犬は30パーセントで、わずか六十頭しかいません」

「えー、そんなに少ないんだ……」

しゅんかん、教室内にざわめきが広がる。

「はい、質問。残りはどうなるんですか？ 盲導犬になれなかった犬は？」

「ちゃんと家庭のペットとして飼ってもらえるよう、新しい飼い主を見つけるそうです」

「ぼくが答えると「見つからなかったら？」と、また質問が来た。」

「見つからないことは今までないそうです」

「ふーん……。どんな生まれでも、たった三割しか盲導犬として役に立たないなんてなあ」

① みんなが個人の感想をぶつぶつと言いだしたので、ぼくは「えへん」と大きくせき払いしてみんなの集中を取りもどした。そして自分で調べたことを切り出した。

「ところが……。調べてみると繁殖した子犬のうち、盲導犬として95パーセントの合格率をほこるブリーダーがいたんです」

「えー、すごーいじゃん！ それって天才！」

みんなが一斉に声を出す。

この声でぼくは調子があがった。

「それはクローンの盲導犬です」

あれほどざわついていた教室が、いっしゅんで水を打ったように静まり返る。

その静寂を破るように、ぼくは発表を続けた。

「盲導犬としてかがやかしい成績を収めた親犬の細胞から生まれた、いわば命のコピーです。コピーなので親の遺伝子をそのまま受けついでいます」

「すごーい！ でもなんで100パーセントじゃなくて95パーセントなの？」

「遺伝子構成が同じでも、記憶は受けつぎません。生まれてからの環境や体験のちがいで、多少変わってくるからです」

「じゃあ、生まれてから、その犬の親と同じ環境で同じ訓練士さんに訓練を受ければ、だいじょうぶってこと？」

クラスメートのひとりが興味深そうに聞いてくる。

② 「可能性としてはそういうことが言えます」

自分でも信じられないほどすらすらと、ぼくはしゃべった。

「じゃあ、盲導犬になれなくて余る犬は、百頭のうち五頭だけってこと？ それってすごーいね」

「すごーい！ 画期的！」

方々から声があがる。

「余った犬、つまり余剰な命がほとんど生まれにくいという点では、画期的かつ合理的と言えます。余剰な命の行き場、つまり新しい飼い主を探す必要がなくなるわけですから」

次のしゅんかん、参観していた保護者の中から「はい！」と声があがった。

担任の先生がびっくりして教室の後ろを見る。父さんだった。

「ちよっと、一言いいですか？」

「ど、どうぞ……」

先生がえんりよがちに言った。

「参観者が意見を言うべきではありませんが、わたしは獣医で、犬や猫の命を預かる仕事をしています。その立場から言わせていただくと、命の余りとか、余剰な命という考え方はまちがっている、この場で申し上げておきたい」

③ ぼくが啞然としていて、父さんは少しおこったような顔で続けた。

「命というのは、生まれるべくして生まれてくるものです。いらない命なんてないし、この世の中に余った命はないということです。」

まして、合理的であるという理由で、^④自然の摂理に反するような繁殖、つまりクローンだが、これはやってはならないことです。

ほかに言いたいことはたくさんありますが、^④命を合理性や理屈で考えるのは非常に危険だということです。以上、授業のじやまをして申し訳ありませんでした」

教室が再び静かになったが、多くの保護者が父さんの言葉にうなずいている。

（そもそも、いらない命がないのなら、どうして希のように捨てられる命があるんだ！ ぼくが去年、調べたみたいに、捨てられて殺処分される命があるんだよ！）

ぼくは父さんにそう言い返したい気分だったが、さすがにそれはできなかった。ぼくがだまって下を向いていると、先生が助け船を出してくれた。

「貴重な意見ありがとうございます。田川さん、では発表の続きをお願いします」

それからは、ぼくは盲導犬の繁殖にはふれず、唯が撮影した訓練センターの写真を順番に見せながら、盲導犬の仕事や視覚障がい者との暮らしのこと、引退してからのことなどを淡々と説明して発表を終えた。

出だしは上々だった。ぼく気分は、どん底まで落ちこんでいた。

「なあ、お前のお父さん、おこっぺんのかな？」

放課後、昇降口のげた箱の前で勇輝が心配そうに聞いてきた。

「さあな。でも関係ないよ。人それぞれ考え方はちがうってもんだ！」

「でも、あたしはおじさんの意見に賛成！ 生まれてくる命で、いらない命なんてないよ」

唯が少ししなめるような顔でぼくを見る。

「じゃあ、今日も六時前に公園でな！」

ぼくはそれだけ言うと、そそくさと学校を出た。

かなり気分が落ちこんだ。あんなこわい父さんの顔を見たのは初めてだった。

どこか寄り道でもしたい気分だったが、希のことを考えると、ぼくの足はいやでも自宅に向かわざるをえなかった。

玄関を開けると、希がいつものようにしっぽをぶんぶん振って、大歓迎してくれた。

希を抱いておでこにキスをする時、^⑤リビングから父さんがぼくを呼ぶ声がした。今日が休日だったことは、幸いではなく災いとなつた。

希を連れてリビングに入る。

「今日の発表のことだけ……、ちょっと話があるから、そこに座れ」

別におこられるようなことは、何もしていない。こっちも聞きたいことがあったから望むところだと、ぼくは思った。

「お前、クローンなんて調べているのか？」

父さんはおこっているようには見えない。その声はいつもどおり低くおだやかだ。

「ネットで調べてたら、たまたま盲導犬のクローンをつくってる会社を見つけたんだ。命のコピーでそのまま才能を受けつぐなんて、すごく画期的だと思ったんだよ。それが悪いことなの？」

ぼくはランドセルをおろして、ソファに座った。

「いいか悪いかを決めるのはお前だ。画期的だの、合理的などと意見を言う前に、クローンというものがどういうものなのか、きちんと調べることだ。……それと、命に余りなんてない。いらない命なんてないんだぞ」

来たなとぼくは思った。

「あ、そう！ じゃあ、ぼくも言わせてもらおうけど、希はいらない命だから捨てられたんじゃないの？ それと、去年、ぼくが自由研究で見学した動物愛護センターでの殺処分だけど、いらない余った命だから、処分されちゃうんでしょ？ ちがいますか？」

^⑥ 思わず最後は敬語になってしまった。それくらいぼくは自信たっぷり、自分の意見を父さんにぶつけた。

「いらない命だから希は捨てられた？ ところが、どうだ？ いらないとだれかが捨てた命が、今のお前にはちばんの宝物になっている。希はお前にとって自分の命と同じくらい大切だろう。ちがうか？ だから、いらない命なんてない」

希のことを父さんに言われて、ぼくはぐうの音も出なかった。

「動物愛護センターで殺処分される犬たちも同じだ。命を命だと思わない人間が捨てる。逆にそうでない人は、いつくしみ大切に。命を大切に思えるか、思えないかは、その人の心でしかない。だから、命は平等なんだ。」

どの命が大切で、どの命が大切じゃないなんて、決めることはできないんだ。航にはすべての命を、心から大切に思える人間になってほしい」

父さんはとなりで寝ている希の頭をやさしくなでた。

希は目を開けて父さんを見上げると、しっぽを振って首をきゅっきゅと左右に振った。

「航……。父さんは、航が希を救ったことをうれしく思ってる。希を心から大切にしてくれることを、ほこりに思っている。」

自分の命ってというのは、自分だけの力がかがやくもんじゃない。自分と自分の周りの人たちの力があって、初めてかがやくものなんだ。希がきらきらとかがやけるのは、お前のおかげでもあるんだぞ。逆に今の航が明らかに変わって、以前より生き生きしているのは希のおかげだ。

「どんな命だっかがやくことができる。だから、いらない命なんてこの世にはない。希を助けたお前なら、それくらいわかるだろう？」

「よく考えてみなさい。部屋に行きなさい」

「よく考えてみなさい。部屋に行きなさい」

希を抱いて自分の部屋へもどると、五時半を過ぎている。公園では勇輝と唯がすでに待っているはずだ。

父さんの話を聞いてもまだ納得できないでいた。希は、父さんに言えなかった一言を、頭の中で何度もくりかえしていた。

（父さんは、いつか四本足で走る希を見たくないの？）

希に足が四本あれば、犬の希はもっと幸せなはずだ。そして、幸せそうに走る希は、ぼくをもっともって幸せにしてくれるはずだ。

ぼくは、見たい。

四本足で、思い切り駆け回る希を……。

ぼくは、^{*2}パートナーズドッグMIRAのプリントアウトを、机の引き出しのいちばん下にしまった。

（これが必要になる日が、いつか来るかもしれない……）

そう思った。

（今西乃子『クロンドッグ』）

（注） *1 自然の摂理……自然界の法則のこと。

*2 パートナーズドッグMIRA……クローン技術を使って、犬を誕生させることができる企業。

問一 —— 線部①「みんなが個人の感想をぶつぶつと言いだした」とありますが、なぜですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 繁殖された子犬の多くが盲導犬になれないのでつらい気持ちになり、新しい飼い主の探し方をお互いに考えていたから。

イ 盲導犬になれる犬の数があまりに少なく、訓練センターで子犬を繁殖させる意味があるのかわからないのか意見が分かれ始めていたから。

ウ 新しい飼い主が見つかることを納得する以上に、盲導犬になれる犬が少ないことを残念に思う感想が入り混じり始めていたから。

エ 今までみんなが知っていた盲導犬に関する知識と異なる話を聞き、本当はどうなのかという意見がそれぞれに高まっていたから。

問二 —— 線部②「可能性としてはそういうことが言えます」とありますが、どうして「そういうことが言え」るのですか。その理由が分かる三十字程度の部分を文中から探し、その初めと終わりの四字をそれぞれ書きぬきなさい。

問三 —— 線部③「ぼくが啞然としている」とありますが、なぜですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 担任の先生は夏休みの自由研究の発表の場を航たち三人に与えてくれたのにもかかわらず、断りもなく保護者の一人である父の発言を許したから。

イ 盲導犬になれない犬がほとんど生まれることのないめざましい技術を、喜びや自信をもって説明していたのに、突然父に考え方をもの否定されたから。

ウ 命の余りとか、余剰な命とかという考え方がまちがっているという判断は、父が獣医であるからこそ専門的に下せることだと感心したから。

エ 何よりも命を大切にできる先進的な技術を用いたクローンの盲導犬のすばらしさを、父があまりにも理解していないことに驚いたから。

問四 —— 線部④「命を合理性や理屈で考えるのは非常に危険」とは、どういうことですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 命というものを、むだのない能率的な面やそれらしい理由づけで大切かどうか判断することには、大きな問題があるということ。

イ 命というものを、実績の年月がまだ少ない最新の技術であるクローンに置きかえて考えることには、取り返しのつかない問題があるということ。

ウ 命というものを、自然の法則や遺伝子の法則にもとづいて考えていくと、理解できない部分が生まれてしまい、不都合な問題になってしまふということ。

エ 命というものを、客観的な視点で考えていくと、本来、主観的な視点で考えなければいけないことを見落としてしまふ恐れがあるということ。

問五 ——— 線部⑤「リビングから父さんがぼくを呼ぶ声がした」とありますが、この後の「航」と「父さん」の会話から、二人にはどのような考えのちがひがあることがわかりますか。解答らんに合うように、それぞれの考えを八十字以内で説明しなさい。

問六 ——— 線部⑥「思わず最後は敬語になってしまった」とありますが、それはなぜですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 日ごろ子供の意見には耳をかたむけない父であるので、大人の言葉づかいなら反論できるだろうと思ったから。

イ 日ごろ子供の意見には耳をかたむけない父であるので、命の問題はていねいに伝えるべきだと感じたから。

ウ 子供の未熟な意見ではなく、動物愛護センターの職員が教え聞かせてくれたことを言ったものであったから。

エ 子供の未熟な意見ではなく、一人の人間として対等に渡りあえる正しい意見であると思ったから。

問七 次の①～⑤の文について、本文から読み取ることができるものは「○」、読み取ることができないものは「×」と答えなさい。

① この物語は現代のクローン技術がどのようなものに活用できるかが示されていると同時に、大切な命というものをどのように考えていくべきなのかという問題も浮かび上がっていた。

② 物語全体に描かれているのは、周囲の人たちの無理解な様子の中にも、正しいことをつらぬこうとする少年の明るい姿であり、本文の終わりでは、希望に満ちた自分の考えや願いが将来実現されるであろうことが暗示されていた。

③ 航が調べてみた結果、優秀な盲導犬の細胞から生まれたクローン犬のうち、5パーセントは記憶を受けつぐことができないため、盲導犬になることはできないということであった。

④ 航が四本足で走れる希の姿を見たいと思ったのは、クローンの最新技術を実行し、社会に大きな驚きを与えた勇気ある存在として認めてもらいたいと考えたからであった。

⑤ 航は不幸な経験をした希の苦しさに心を寄せることができるからこそ、幸せそうに駆け回れる姿を望んでいるのだが、クローンはそのための方法であることを父に言い出すことができないもどかしさを感じていた。

四 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。(設問の都合上、本文を一部省略しています。)

子どもが単語を話し始めるのは、1歳前後です。ということは、指さしの理解にしても、ほかの人が見ているモノを探しだすにしても、まだ完璧にできるようにはなっていない時期です。それにもかかわらず、子どもは、単語と意味(モノ)を結びつけて、意味ある単語を使い始めるのです。これはどういうことなのでしょう。

このことについて考えるために、次のような状況を想像してみてください。

あなたは、指さしをしても、まだちゃんと見てくれない子どもと一緒に散歩をしています。きれいな花を見つけたので、「オハナ」と話しかけようと、子どもを見ました。すると、子どもは子どもでまったく違う方向からやってきた犬を見えています。このような場合、あなたはどうするでしょう。初めの予定どおり、花を指さして「オハナ」と言うのでしょうか。それとも、予定を変更して、子どもの注意に合わせ「イヌ」と言うのでしょうか。

たぶん、多くの人が、予定の変更を選ぶのではないかと思います。指さしの理解がまだ完璧でないときには、周囲の人の方がそんな子どもに歩み寄って、その理解を助けようとする、それが子どもとのやりとりで少し慣れてきた大人たちのすることです。

1歳が近づく子どもは、たとえば、^{*}社会的参照の場面では、自分は自分でモノと向き合いながら、同時にほかの人はどうしているのかを気にし始めます。あるいは、ほかの人と向き合いながら、そこに一緒に見たり、楽しんだりするためのモノを持ち込むようになります。言語の学習でも、相手が言った単語の意味を知るために、相手の考えていることに気持ちを向け始めます。相手が考えていることを知るには、相手の視線や指さしの手がかりになります。もともと、その努力は初めの頃はなんとも不器用で、指さしの指先からモノまでの距離が広がる、指さされているモノがわからなくなったりします。それでも、^①そんな不器用さを補うべく、工夫して働きかけてくれる周囲の人たちにも支えられて、子どもの単語の意味の学習は始まるのです。

こうして1歳頃から子どもは単語を話し始めます。ただし、ここからすぐに、話すことのできる単語の数が爆発的な勢いで増えていくわけではありません。

この足踏みの理由ですが、一つは、この時期の子どもは **A** や視線の理解がまだ不安定で、相手が言った単語を結びつける先を探すのにまだまだ苦労しているから、ということがあるでしょう。

ただこの時期の子どもの単語の使い方を見ていると、足踏みの理由はほかにもありそうです。まず子どもの単語の使い方は、大人から見ると、ヘンに限定されている場合があります。たとえば「家の窓から見た車にしか『ブーブ』と言わない」といった具合です。

同時に、単語が、あまりにもさまざまな対象に使われすぎる、ということも見られます。つまり単語の意味が広すぎるのです。たとえば、^②散歩の途中で見かけたチワワのことを「ワンワン」と教えたなら、チワワだけでなくすべての犬種、さらには、猫や熊のぬいぐるみもすべて「ワンワン」になってしまったりします。

大人の方は、子どもにその対象を示して、「ブーブだね」とか、「ワンワンだよ」と教えれば、それでもうその単語の意味はわかってもらえるものと期待しています。ここで例に挙げた「ブーブ」や「ワンワン」の事例でも、子どもは、その単語をその対象と結びつけることには成功したようです。しかし、その単語の使い方を見ていると、狭すぎたり、広すぎたり、解釈の仕方がグラグラと定まらない感じでしょうか。どうしてこのようなことになってしまうのでしょうか。

この問題について考えるために、次のような状況を想像してみてください。あなたは言語学者で、今まで知られていなかった言語の辞書を作ろうとしています。そのために、その言語を話す協力者と行動をともにし、彼が出した音声とその意味を書き留めていきます。今その協力者が、草むらから飛び出してきた白いウサギを指さして「ガバガイ」と言いました。

ここで、あなたなら、このガバガイの意味として、どのようなことを書き留めるでしょうか。「ウサギのこと」でしょうか。それとも、「動物のこと」ですか。あるいは、「この村でみんなに可愛がられている、このウサギの名前(固有名詞)」とか? それとも「白くてふわふわしている」?

こうして考えてみると、何かを指さして単語を言うというだけでは、単語の意味を伝えるには十分でないことがよくわかります。意味の候補は、このようにいくらかでも出てきてしまうからです。どれが本当の意味なのかは、なかなか決められません。

この問題を指摘したのは、アメリカの哲学者クワインです。「モノを示して単語が言われただけでは、その意味は定まらない」というこの問題は、彼が示したこの例話にもとづいて、ガバガイ問題と呼ばれたりもします。単語を学び始めたばかりの子どもも、まさにこのガバガイ問題に直面していると考えられるのです。

家の窓から外を走っていく車が見えた。そのときに、「ブーブ」と話しかけられた。ブーブというのは、窓から見えた、あんなふうに走り去っていく車のこと?

散歩の途中で、毛むくじやらの、四本足で歩く生き物に出会った。お父さんは「ワンワン」と言っていたけれど、こういう感じの、毛むくじやらで、四本足の生き物は皆「ワンワン」なんだろうか?

このように、新しい単語に出会うたびに子どもは、それがどのような意味なのかについて試行錯誤を繰り返しているのだとすれば、確かに、たくさんの単語を素早く覚えていくことなどできないはずだ。

【中略】

では、子どもはいつ頃、大人の常識に気づいて、単語の意味をめぐる試行錯誤から抜け出すのでしょうか。子どもの単語学習がトップスピードにのるのは、話すことのできる単語の数が100になるころ、月齢にすると20か月すぎだと思われま。

確かにこのくらいの時期、指さしの理解などもしっかりしたものになり、加えておおよそこの時期、単語の意味のとらえ方でも、子どもは「大人」に追いつくようです。その変化の一端は、アメリカの心理学者ガシーシュコフリストウとスミスの行った次の研究でもとらえられています。

この研究では、**B** にしたがって、子どもの単語解釈の仕方がどのように変わっていくかを検討しました。対象になったのは、研究のスタート時点において、単語を少し話し始めたくらいの子どもたちでした。この子どもたちはその後、3週間おきに、初めて聞いた

単語をどのように解釈するかを調べられました。その調べ方は、次のようなものです。

まず、学習段階においては、たとえば、素材は木で、表面は赤地に白の水玉模様^かに塗^ぬってある、U字型の物体(図表の①)を見せて、「これはダックスよ」とその名前を教えます。

そして、そのあとのテスト段階においては、もとの物体と形は同じだけれども素材も表面の色や模様も違^{ちが}う物体(図表の②)、表面の色や模様は同じだけれど形や素材は違う物体(図表の③)、素材は同じだけれども形も表面の色や模様もまったく異なる物体(図表の④)を並べて見せました。そして、子どもたちはそのなかから「ダックス」をあるだけ選^{えら}ぶように言われたのです。

これだけなのですが、子どもがテストのときダックスとしてどれを選^{えら}ぶかを見れば、この単語をどのように解釈したかがわかります。たとえば、表面の色と模様だけが同じ物体を選^{えら}ぶなら、「ダックスとはそういう表面(色、模様)をしたモノのことだ」と考えたことになります。それで結果はどうだったでしょう。

この研究がスタートしたときの子どもたちは平均17か月、話せる単語の数は40弱でした。それで最初の頃、「ダックスをちょうだい」と言われて子どもたちが選^{えら}ぶ物体は、形が同じ物体のこともあれば、表面が同じ物体のこともあり、素材が同じ物体のこともある、という具合でさまざまでした。どのようなどころが同じならダックスなのか、決めきれない、といった感じでしょうか。

それがしばらくすると、子どもたちは **C** 物体ばかりを選^{えら}ぶようになり、**D** 物体や、**E** 物体は選^{えら}ばなくなりました。どうやら「モノを示して単語が言われたら、その単語はそういう形をしたモノの名前である」という、大人の常識^{ちじき}がわかったらしいのです。

このとき、子どもたちは平均で21か月半、話すことのできる単語の数はもう100を越^こえていました。そしてこのとき既に子どもたちの単語学習のスピードは爆発的な勢いになっていったのです。

(注) *社会的参照……子どもが、初めて見たモノや状況に対してどうふるまったらよいか迷ったときに、一緒にいる人の様子(表情や声など)を見て参考にすること。

(針生悦子『赤ちゃんはことばをどう学ぶのか』)

【 図表 】

(1) 学習段階「これはダックスよ」		
		
①形 (U字型)、素材 (木)、色と模様 (赤地に白の水玉)		
(2) テスト段階「ダックスはどれ? ほかにダックスはある?」		
		
②形だけ同じ (青色のU字型スポンジ)	③色と模様だけ同じ (布製のクッション)	④素材だけ同じ (木製の三角)

問一 ——線部①「そんな不器用さを補^{おぎな}うべく、工夫して働きかけてくれる周囲の人たちにも支^{たす}えられ」とありますが、周囲の人はどのようなことをしてくれているのですか。文中から二十五字以内で探し、初めと終わりの五字を書きぬきなさい。

問二 **A** に入る言葉を文中から探し、書きぬきなさい。

問三 ——— 線部②「散歩の途中で見かけたチワワのことを『ワンワン』と教えたら、チワワだけでなくすべての犬種、さらには、猫や熊のぬいぐるみもすべて『ワンワン』になってしまいました」とありますが、なぜ子どもはチワワだけでなくすべての犬種や、猫、熊のぬいぐるみにも「ワンワン」という単語を使ってしまうのですか。この後に述べられている「ガバガイ問題」をふまえて次の書き方にしたがって説明しなさい。

【書き方】 大人は・・・、子どもは・・・

問四

に入る言葉として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 聞くことのできる機会が増える
- イ 見ることのできる物体が増える
- ウ 話すことのできる単語が増える
- エ 選ぶことのできる機会が増える

問五

、、 に入る言葉を想定すると、 は【図表】の②～④のどの物体のことを指していると考えられますか。最もふさわしいものを図表の②～④から選び、記号で答えなさい。

問六

——— 線部「子どもは、単語と意味（モノ）を結びつけて、意味ある単語を使い始める」とありますが、子どもはどのような成長を通して意味ある単語を使えるようになるのですか。本文全体をふまえて百字以上で説明しなさい。

(お わ り)

受験番号

氏名

得点

※には何も書かないこと

⑥	①
⑦	②
な	
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤
いる	

二

問一

①

②

問二

①

②

③

三

問一

問二

初め

〽

終わり

問三

問四

問五

航は

80

※

問六

問七

①

②

③

④

⑤

80

※

四

問一

初め

〽

終わり

問二

※

問四

問五

問六

100